

「グローバル化に対応した人材教育育成の実践

ーアメリカ研修導入の教育的意義ー

佐藤智子（高等教育推進センター、教授）、三宅禎子（高等教育推進センター、教授）

<要旨>

本研究では、「グローバル化に対応した人材育成」を「異文化コミュニケーション能力の育成」と定義付け、2週間のボストンでのアメリカ研修が、この能力育成にどのような効果があるのかを、3年間にわたる継続的な調査を通して考察した。アメリカ人学生やホストファミリーとの討論、プレゼンテーション、博物館での質疑、ハイチ系アメリカ人サポートセンターでの交流、ホームレスや病人へ食事を提供する施設でのボランティア活動などを通して、学生達はコミュニケーション能力を高め、異文化を理解することができたと結論付けることができる。

1 研究の概要

本学においては、高等教育機関として社会の変化に対応するために、「グローバル化が進展する中で、国際交流を活性化し、国際的視野を備えた人材を育成」し、「専門教育の基礎づくりや国際化に対応するための語学教育を充実する」ことを、重要課題として取り組むことを計画している。それを実施に移すべく、平成26年度から新しくプロジェクトF（アメリカン・スタディーズ）を導入した。そして、授業の一環としてアメリカ研修を実施した。このプログラムを通して、「国際的視野を備えた人材育成」の手法を獲得することも目的のひとつである。

を行うようになった。それはとりもなおさず、自分の言葉で語る能力を身に付けた証左でもある。



アメリカン・スタディーズ報告会ポスター

2 研究の内容

上述の目的を成就させるために、ボストンを中心にして2週間にわたる研修を実施した。研修の内容は宗教、政治、経済などの側面からアメリカの自由を理解し、さらに経済的な自由を享受できない人々に施されているセーフティーネットを体験することである。研修終了後、毎回アンケート調査を行い、さらに、学生と教員がそれぞれ「アメリカ研修報告書」を作成した。

3 これまでに得られた研究の成果

アメリカ研修についてのアンケート調査の結果や、学生の報告書を精読すると、この研修は「グローバル化に対応した人材育成」の土台作りとしてその機能を十分に果たしていると言える。「アメリカの歴史を学ぶことができた」、「観光では行くことができない施設などを訪問することができた」、「アメリカ人の日々の生活を体験することができた」、「外国人を公平な目で見える姿勢が確立できた」、「英語の力が向上し、さらに学ぼうという意欲が高まった」という設問に、ほぼ全員が肯定的な回答をしている。

前期の講義受講とボストンでの研修、後期の研修報告会と報告書作成の4段階を経て、学生は初めて正しい知識を獲得し、それを基にして他者への能動的な働きかけ

4 今後の具体的な展開

アメリカ研修を足がかりにして、アメリカやオーストラリアに1年間留学した学生も出てきている。2017年9月からオーストラリアに留学する学生もいる。英語の資格試験の点数が大きく伸びた学生もいる。アメリカ研修参加後の学生を追跡調査し、この研修が一過性のものではなく、有意義な継続性を持つことを考究する。